

* 徳島大学女性研究者

Woman

徳島大学女性研究者ロールモデル集



3





上段左から順
●は、研究支援制度利用者

参加者

- 山内 あい子(徳島大学AWAサポートセンター副センター長・徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 医薬品情報学分野 教授)
- 本仲 純子(徳島大学AWAサポートセンター センター長 特任教授)
- 阪間 稔(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 放射線理工学分野 准教授)
- 香川 征(徳島大学学長)
- 岩川 雅士(徳島大学 理事(総務・財務担当)／徳島大学副学長／徳島大学男女共同参画推進室長)
- 佐々木 千鶴(徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 バイオマス資源分野 助教)
- 石澤 有紀(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 薬理学分野 特任助教)
- 奥村 仙示(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 臨床栄養学分野 プロジェクト助教)
- 工藤 景子(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 口腔外科学分野 助教)

研究者にとっては、お金の補助より時間の援助に魅力を感じている方が多いです。研究成果をだし、キャリアを構築するために、育児と仕事の両立という過酷な時を乗り越えて現在にいたっておられます。そのためにこれらの支援制度が大いに役立っており、システムの重大さを感じています。今後もセンターの熱意を持った取り組みに期待しています。



岩川雅士
理事



山内あい子
副センター長

本学における女性研究者の在職率が、現段階で19.2%まで上がったのは、この取り組みがあったからだ実感しています。ベビーシッター制度における養成講座では、他大学や一般参加者も多く、地域への貢献もこのセンターでは担うことができました。さらに、地域との連携を進められる制度の構築を目指します。そして多くのロールモデルが作れるよう尽力したいと思います。



香川 征
学長



本仲純子
センター長

今後も、AWA(OUR)サポートシステムの研究支援制度や異分野間の研究交流や共同研究を促す取り組みなど、大学としてもできるだけ応援して、女性研究者のサポート体制を継続していきます。また、AWAベビーシッター制度など、育児支援については、大学全体で取り組み、地域との連携等を円滑に行い、支援の輪を拡げていきたい。これからも、徳島大学における女性研究者の活躍に大いに期待しています。

3年間の[平成22年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業]は終わりますが、立ち上げ構築したシステムについては、維持するだけでなく、皆さんの意見や要望を参考に、より働きやすい環境を作ることが必要だと考えています。全職員が働きやすい環境となり、男女共同参画社会のメリットを実感できるよう、システムを発展させていきたいと思ひます。

研究者座談会

＊ 座談会で話し合われたこと

研究者支援制度
出席・育児等により研究時間確保が困難な研究者に研究支援員を配置するこの制度は、利用者にとっても好評で、各々の研究者より「育児で研究を途中で中断したり、研究補助業務を諦めたりしないで、研究補助業務を気兼ねなくサポートしてもらい研究結果を出すことができた。」「三つ子の誕生で大変だったが、この制度を利用して子育てと研究のバランスを取りながら、研究活動を続けることができた。」「研究のサポート制度は、限りある時間が確保できるのでもっと助かる、この制度がなければ働き続けることを断念していたかもしれない。」「この感想が述べられました。子育て中の研究者にとって、研究の継続には、育児と研究時間をサポートしてくれることが大変重要だと話し合われました。現在は、「平成22年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業」として採択され実施していますが、「今後も研究支援制度については、引き続き実施していきたい。」と学長が語られました。また、研究者より「支援員である大学院生が研究者のサポートを行うことで、自らの研究モチベーションアップとなつて、支援員も学会発表に取り組み、研究者としての育成にも繋がった。」と述べられました。この制度は、研究者支援のみならず、未来の研究者育成も担っている制度として成長しています。

女性研究者の育成と研究活動の継続
女性研究者の中には結婚や出産を考え、研究員になることを最初から諦めている人や、サポートがなく、途中で退いてしまった現実があるように感じました。実際にサポートを受けている研究者は、「このサポートがなければ続けることができなかったかも・・・」と、AWAサポートシステムの必要性を述べられました。また、若手研究者の育成や研究の活性化のために導入された現在の任期制については、「育児と両立しながら必死に頑張つて、子育てがひと段落して、さ

あ、これからやっと研究に集中できるという時に、任期が満了となつてしまう不安があると語られました。これに対して理事から、雇用の安定を図ることを目的とした労働契約法の改正ルールが来年4月から適用されることに伴って、大学においても、任期付教員の雇用の在り方について検討しているとの説明がありました。

女性研究者への期待
少子化、高齢化については回復の兆しがなく、持続可能な社会の実現のためには、国力を元気にする女性のパワーが必要であると学長が述べられました。研究を続けている人のほとんどが「ロールモデルが必要」と答え、ロールモデルを見つけていくことの必要性を自らロールモデルになることの重要性も話し合われました。「今は感謝して多くの手助けを受け、将来は自分たちが還元していきたい。」と研究者の皆さんが述べられました。



AWAサポートシステム
支援制度の3つの柱

- 1 研究支援制度
- 2 AWAベビーシッター制度
- 3 メンター制度

詳細は、P18をご覧ください。

貴女の研究！煌めく未来のために

＊ 研究者支援・徳島大学AWA(OUR)サポートシステム

2012年12月11日、AWA(OUR)サポートシステムの1つ「研究支援制度」を利用して研究者5名と、徳島大学学長、徳島大学理事、そしてAWAサポートセンター長、副センター長にお集まりいただき、女性研究者の現状やAWAサポートシステムの様々な支援制度と今後の取り組みについて話を伺いました。

Kayoko Ueno



上野加代子

うえの かよこ

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授社会学、学術博士

略歴
大学卒業後、イスラエルのキブツで家族をベースにしない社会があることに興味を持ちキブツで暮らす。大阪市立大学大学院家族社会学専攻修士・博士課程を修了。その後2つの大学で勤務、2004年より現職。児童虐待などの研究に加え、現在は移住労働者の調査・研究を行う。「児童虐待の社会学」「国境を越えるアジアの家事労働者」など多くの書籍を出版。シンガポールの外国人労働者支援NGO(H.O.M.E.)の調査部門ディレクター(ボランティア)としても活躍。

女性が国境を越えて国を結ぶ

私は現在、シンガポールをはじめとする東アジアへ出向き、移住労働者に直接調査を行うといったフィールド研究を中心に、アジア全体を繋ぐ研究を行っています。今や女性が生まれた国で生涯を過ごすのではなく、生活しやすい場所、働きたい場所を探し移動するのが当たり前。そんな女性自ら労働者として単身で国境を越える国際移動の女性化現象に注目しています。



My Favorite

各国・各地をともにするフィールドノート&ICレコーダー

の十分なインプットがないと発想の展開はできません。また、自分が真似したいと思う研究上のロールモデルを見つけたことも研究者を目指す上で必要だと思います。私もいつもそういう人を見つけています。

さらに研究者には様々なサポートが欠かせません。私は頻りに海外出張させてもらっています。これにも事務方と同僚のサポートが必要です。執筆した論文は投稿する前に同僚に読んでもらうなど、そういう支援体制が私の所属学部にはあります。

とくに女性は出産、育児、介護など仕事とプライベートのバランスで苦勞することも多いかと思えますが、職場や同僚のサポートを得るなどして上手に調整してください。

英語で広がる就職マーケット

学生をはじめ多くの人に日本語以外の語学(英語)を習得し、就職難といわれている時代に、世界を視野に入れたグローバルな活動ができる人が増えることを期待しています。英語を習得することで、英語圏+アジアがほぼ就職のマーケットになります。研究者としても英語は、研究発表や海外の研究者とのコミュニケーションに欠かせません。今の時代、研究者として活躍できる第一歩は、英語の実用力にあると私は思っています。

働く場所は、世界を視野にいれて

研究者はインプットアウトプットだと考えています。ですから、時間があれば文献を読むことを心がけてきました。読書量が論文の質に転化されるだろうし、文献

「私たちが研究支援制度を利用しました！」

① 研究支援員制度やAWAベビシッター制度等を利用して得た研究成果や、働く上で役立ったこと

② 研究者としてのvision

石澤 有紀

＊ 子ども2人 / 4歳・0歳



① 私は、AWAサポートシステムをフルに活用させていただいています。初年度は支援員の方に、研究の立ち上げから夜間休日の実験まで助けていただき、今年度は所属の大学院生の支援員に産休・育休中も実験をお願いできました。その分私は国際学会での発表や論文執筆、子育て等に時間を割くことができました。出産前の体調不良時には休憩室を利用させていただくなど大変助かっています。

工藤 景子

＊ 子ども3人 / 3つ子2歳



① 臨床系の教室に所属しているため、「臨床」「教育」「研究」の3つを担う必要があります。さらに家庭では2010年に3つ子を出産したため、家事・育児に費やす時間が必要で、1日24時間しかありませんが、「研究支援員制度」を利用していただくことにより、研究の一部を助けて頂いているので、時間の足りない分を十分に補っていただいています。本当は、3つ子を妊娠した時に「続けられないかも」と思ったのですが、この制度のことを聞き、現在も続けることができています。

奥村 仙示

＊ 子ども2人 / 9歳・5歳



① 私の子どもが小さい頃は、このようなシステムがなく、夫婦ともに県外出身ということもあり、両親に助けてもらうこともできなくて大変でした。現在は、研究員支援制度により、データの入力作業や調べものなど、限られた時間の中で行いつらい仕事を依頼できるので、興味のある研究に時間を使えるようになるようになりました。このようなシステムは育児中の女性にとっても嬉しいシステムだと思っています。

阪間 稔

＊ 子ども2人 / 8歳・4歳



① 昨年は妻がこの制度を受けており、今年度は私が受けさせてもらっています。具体的な成果としては、私の専門である誘導結合プラズマ質量分析による元素同位体比測定などのデータ解析が挙げられます。これら手法は、多試料測定と継続的な精度管理測定が重要で、育児等で中断を余儀なくされる時の支援員による実験補助で、貴重な実験データが得ることができ、国際学会で研究発表を行うことができました。

佐々木千鶴

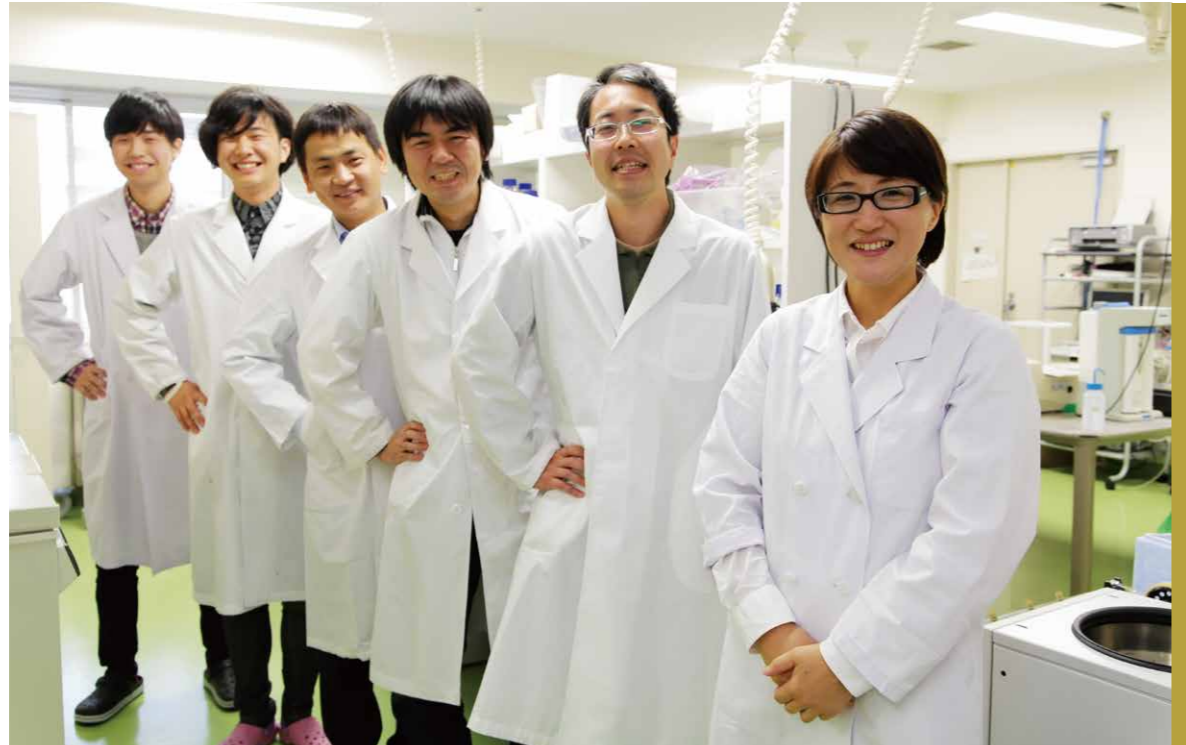
＊ 子ども1人 / 0歳



① 産休に入る直前から、研究支援員制度を利用していただいております。まだ子どもが小さく、6時には帰らないといけないので、「あとお願いね」と気軽にお願いできる環境は、限られた時間の中で仕事を片付けるために大変助かっております。任期はあと4年ありますが、成績が左右するので時間の援助は今後も続けていただきたいです。

② 「子育て等で大変なのは、一時だけでずっと続くものではない。」と何人もの働く女性がおっしゃっています。周りの人の手を借りて乗り越えながら、今後も研究活動を続けていきたいと考えています。また、私自身まわりの学生から相談されることもあり、自らロールモデルとなるよう積極的に家庭と仕事の両立に取り組んでいきたいと思っています。

* 研究者座談会参加者



坂田 ひろみ

さかた ひろみ

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
発生発達医学講座 機能解剖学分野
講師 博士(医学)

略歴

宮城学院女子大学卒業後、徳島大学大学院栄養学研究科に進学。博士前期過程修了後に解剖学第二講座(現機能解剖学分野)に助手として採用され、平成14年に博士号(医学)取得。平成19年より現職。2児の母。



My Favorite

ラットの胚を取り出す作業などに使うピンセット(一般的なものよりも柄の部分細長く、程よい細さと重さ)

すべての巡り合わせに感謝して...

動物実験に興味を持ち、解剖の道へ
両親や栄養士の姉に管理栄養士になることを勧められ、地元の女子大に入学しました。管理栄養士として職を得るための準備をしながら、穏やかで楽しい学生生活を送っていたのですが、たいした努力や経験もしないまま就職することに対し「味気ない人生になってしまうのでは...」と、漠然と思い始めました。その頃、授業で行った動物実験に興味を持ったのがきっかけで大学院進学を考えたところ、徳島大学の栄養学科を紹介してもらいました。しかし結果は不合格。再度大学院を受験するため、専攻生として栄養学科の病態栄養学講座(現臨床栄養学分野)に所属させてもらうことになりました。翌年、大学院入試に合格後、本格的に実験をスタートさせました。

周囲の環境に導かれ、今に至る
就職後は、所属分野が脳発生の研究を行っていたこともあり、脳発達障害が研究テーマになりました。研究テーマを自ら選んだというよりは、周囲の環境に導かれながら自然に定まってきた感じ

現在、他の教室スタッフや大学院生、医学部学生とともに、妊娠中のアルコールや薬物摂取がもたらす胎児の脳発達障害につ

いて、病態と障害発症機序の解明を進めています。また、化学物質の発生神経毒性評価法の開発や、脳発達期の環境要因(暗環境、摂食、母体など)が脳発達に及ぼす影響の検討などにも取り組んでいます。
女性研究者を目指すみなさんへ
現在は女性支援の制度が整い、結婚・出産を経ても仕事を続けやすい環境が提供されつつあります。バリバリ仕事をやる研究者になりたいという人には有り難いことだと思います。しかし、いくら制度が整ったとしても、日頃一緒に仕事をしている人たちの配慮も忘れてはならないと感じています。折角の制度ですから有意義に、そしてなるべく気持ちよく活用できればいいと思います。
一方で研究者は、結婚しても子どもを産んでも、ずっとがむしゃらに働き続けなければならぬのでは?と不安に感じる方もおられるのではないかと思います。研究者でも働き方や人生観は人それぞれです。環境も異なります。いろいろな働く女性のライフスタイルを参考にしながら、自分らしい研究者スタイルを見つけてください。



助けを借りてゴールを目指すのは、恥ずかしいことではない

AWAサポの研究支援員制度を利用
現在は、口腔外科医として主に外来診療を担当して、診療の合間に研究を行っています。以前は、骨形成や再生医療の研究を主に行っていましたが、最近口腔がん治療時の副作用軽減を目指す研究を行っています。出産前のように休日や夜遅くの仕事ができないため、研究をする時間はかなり制限されますが、AWAサポセンターが実施している「研究支援員制度」を利用して頂いており、かなり助けられています。支えてくれる全ての人の感謝の気持ちを忘れたい

My Favorite

誕生日祝いに親友からもらったマグカップと大好物のチョコレート。



を割いて頂いているのと同じです。感謝の気持ち、は常に忘れないようにしたいと思っています。いま受けている恩恵にいつか返したい
「三つ子を育てながら、仕事もして偉いわね」と褒めて頂くことがあります。でも、それは私が偉いではなく、私を支えてくれたる全ての人たちがあつてこそだと常々感謝しながら過ごしています。仕事内容や仕事時間に配慮して下さる教授をはじめとする医局員の皆さん、仕事に子どもたちの世話をしてくれている実家の両親。家事を分担してくれる主人。応援や励ましの言葉をかけてくれる友人や知人たち。本当にたくさんの方が支えてくれていると思います。ここ数年で、女性研究者の働く環境も随分整備されてきました。私もその恩恵を大いに受けています。その恩恵をいつか恩返しすべく、日々研鑽を積みたくと思っています。

工藤 景子

くどう けいこ

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
口腔外科学分野
助教 博士(歯学)

略歴

徳島大学歯学部卒業後、第1口腔外科へ入局。2009年12月、口腔外科学分野(旧第2口腔外科)へ異動。その後、2010年10月に三つ子の男児を出産。約1年4月の産休育休を経て、2011年11月に復帰。口腔外科専門医、がん治療認定医。



一生懸命打ち込める仕事があるということが生きがい

忙しい生活が大好き
ひとつのことをコツコツ長く
中学・高校とバスケットボールに全力を注いできたので、大学で



My Favorite

ドイツやスウェーデン、トルコなど海外で買ってきたお気に入りのお皿たち。



奥村 仙示 おくむら ひさみ

徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部プロジェクト助教
臨床栄養学分野 博士(栄養学)

略歴
徳島大学栄養学科を卒業後、同大学院修了。愛知医科大学付属病院で栄養士として勤務した後、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 臨床栄養学分野に教務員として勤務。2年前よりプロジェクト助教。

変化をチャンスにできた仕事

このように環境が変わっても与えられた場でやりがいやできることを見つけ仕事をしてきた経験が、現在の薬剤師育成に役立つのではないかと思いついた。現在の薬剤師育成に役立つためには6年制に進み実務実習を行う必要があります。様々な現場を経験した立場から、実務家教員として役割を果たしていきたいと思っています。

My Favorite

子どもが作ってくれたピースのストラップ



多くの研究者と接した中で思うことは、研究者は広い視野、深い洞察力、さらに現代社会への好奇心を持っているということです。社会で様々な経験をしたからこそ大切だと感じるその研究者の心構えを持ちながら、私自身が好奇心を忘れずに、学生を指導していきたいと思っています。



中瀬 真理 なかせ まり

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
助教 臨床薬学実務教育室 修士(薬学)

略歴
両親が医療関係の仕事をしてきたこともあり、臨床薬剤師に憧れ徳島大学薬学部へ入学。同大学院薬学部医療薬学専攻第一期生として入学。博士前期過程終了。その後同大学病院にて臨床薬剤師として勤務していたが、夫の転勤を機にアメリカの大学や研究所で研究助手として働き、双子を出産。帰国後、託児施設がある県内の病院にて再就職。2012年7月より現職。



上手 洋子

うわて よしこ

徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部講師
博士(工学)

My Favorite

FREITAGの
メッセンジャーバッグ



略歴

エンジニアに憧れて、阿南工業高等専門学校、電気工学科に入学。卒業後、徳島大学工学部電気電子工学科に編入学。同大学大学院電気電子工学専攻進学、博士前期課程修了。その後、同大学大学院情報システム工学専攻進学、博士後期課程修了。JSPS海外特別研究員としてチューリッヒ大学・スイス連邦工科大学の合同研究機関であるニューロインフォマティクス研究所に2年間留学。

研究者とは、大草原を駆け抜けるチーターである

**土日も仕事のことを考えたい、
と思える職業**
私の専門分野は非線形回路工学で、現在は発振器やカオス回路を結合したときに観測される同期現象の調査を行っています。これまでの結合発振器システムでは、結合形状がシンプルなものが多かったんですが、私はより実物理システムに存在するネットワーク構造に近い結合を考え、フラストレーションがかかるような場合の同期現象に着目して研究を行っています。また、人工ニューラルネットワークにニューロバイオロジーの概念を取り入れた新しいニューラルネットワークモデルの提案も行っています。

**この分野に興味を持ったのは、
母校・阿南高専の卒業研究テーマ
だったことと、「土日も仕事のこと
を考えたい」と思えるような職
業に」という、テニス部の恩師の
言葉に共感したからです。**

**いろんなことに
トライした高専時代**
阿南高専時代は、自分は何に向いているのかを探るために、いろんなことに挑戦しました。3年生の時にロボットコンテスト、4年生のときにプログラミングコンテストに参加しました。サークルもテニス部を5年続け、高学年では女子硬式野球同好会や徳島文化友の会などを立ち上げました。大学に編入してからは

こともありました。しかし、そろそろ子どもも私の手を離れつつある今、子どもがいたから頑張れたと強く感じます。家族、保育所、ファミリーサポートセンター、学童保育、職場の上司や同僚。多くの人々の理解と支えがあったからこそ、続けていくことができました。子どもに働く背中を見せながらも参観日は必ず行くなど、ほつたらかされていく感、を我が子が抱かないよう、工夫していました。

**今後の目標は、世界で通用する
研究者になること、国際会議
のジエネラルチェアをできる器に
なることです。夢は、海外の大学
で教鞭をとり、研究室をもつこ
とです。**



岩佐 幸恵

いわさ ゆきえ

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授
看護教育学分野 博士(学校教育学)

My Favorite

学生さんからの寄せ書き



略歴

高校卒業後、徳島大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程に進学。卒業後、7年の臨床経験を経て徳島県立看護専門学校教員に。2006年から徳島大学の教員をしながら大学院へ進学、兵庫教育大学大学院連合で博士の学位を取得。

真実を求め、愛に生きる

**人間の発達過程研究と
看護師の育成**
看護の対象である人間の発達過程を、身体・生活の視点から研究しています。主に、自律神経機能の発達過程やサーカディアンリズムについてです。また、看護基礎教育と新人看護師研修の連携など看護師のキャリア形成支援についても取り組んでいます。ただ、看護師の育成には非常に時間と労力がかかり、授業に時間をとられて研究の時間を確保するのが難しいことが悩みです。

現場を変えるには教育から
なんとなく選んだ看護の道でした。大学3年生の時、恩師に「あなたは何になるのか?」と尋ねられ、安易に「看護師です(当時)は看護師ではなく看護婦と呼ばれていました」と答えた私に恩師は、「教員養成課程の学生なのだから将来は看護教員でしよう」という意味を込めて「違うでしょ」とおっしゃいました。以来、看護を教えることについて考えるようになり、大学卒業後、臨床に出ましたが現場の抱える問題にシレンマを感じ、悩みました。そして現場を変えるには教育から、との思いを強くし、看護教育の道を選びました。

子どもがいたから頑張れた
子どもが小さい頃は、女性が仕事をしていく上で結婚や子育てはハンディキャップだと感じて

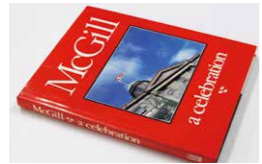
研究に没頭する日々でしたが、国際会議参加のためにいろんなアルバイトも経験しました。**海外の大学で教鞭をとり、研究室をもちたい!**
生涯走り続けることができるか無から有を生み出すクリエイティブな能力があるかどうか研究者として成功する重要なポイントになると思います。誰かを真似るのは簡単ですが、自ら道を切り開くのは至難の業です。それを引退まで続けられるのが真の研究者だと思います。新しいアイデアを出すために頭はフル回転、論文締切前は徹夜の日々が続きます。研究にはゴールがないので、ずっと走り続けなければなりません。でも、世界で誰も成し得ていないことを自らの視点で追い求めることができます。それがこそが研究者の醍醐味だと思います。

教え子たちと臨床の場で再会
教え子たちが臨床で指導的立場に立つ年齢に達し、いろいろな場で再会することが多くなりました。リタイアすることなく仕事を続けて活躍している姿を見ると、とても嬉しいです。「現場を変えるには教育から」という私の夢に、一歩近づいた感じがします。



脳神経外科初代女医は研修医の母

幼少時から現在に至るまで、様々な分野に興味があり習い事をたくさん(書道、ピアノ、陸上(短距離)、ハードロック(Vo)、茶道・華道、英会話、フラメンコなど)してきました。その礎があったおかげか、カナダマギル大学モントリオール神経研究所に留学していた際には、経歴や人種の違う人々との交流を深めることができ、それがまた今の仕事にも役立っているのではないかと感じてます。



My Favorite

カナダマギル大学の公式本(多国籍友人からの寄贈)

**たくましく成長して巣立つ
研修医たちを送り出す**
平成3年に徳島大学を卒業後、徳島大学脳神経外科に初めての女医として入局しました。脳神経外科や脳卒中学会の専門医を取得したあとは、脳血管障害の診療に携わってまいりました。

その後、縁あって、平成20年から徳島大学病院の卒後臨床研修センターの初代専任医師(副センター長)を拝命し、現在は研修医の指導やサポートを含めた研修管理を行っています。

「為るようにはかならない」と腹をくくっている気がします。元研修医は今や頼もしい同僚。ターニングポイントには新たな出会いが待っています。自分で決断することが難ければ、時には流されてみるのもいいかもしれません。



西京子

にし きょうこ

徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部 講師
脳神経外科学分野 博士(医学)
徳島大学病院 卒後臨床研修センター副センター長

略歴 徳島生まれ、徳島育ち。平成3年徳島大学医学部医学科卒業、同年徳島大学脳神経外科に入局。平成14年医学博士取得、2年間カナダマギル大学モントリオール神経研究所に留学。平成20年より徳島大学病院卒後臨床研修センター副センター長に就任。脳神経外科専門医、脳卒中専門医。平成15年脳神経外科学会奨励賞受賞、平成24年康楽会賞受賞。



佐々木千鶴

ささき ちづる

徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部
助教 生物反応工学講座 博士(工学)

略歴 科学者である父と同じように科学技術に関わる仕事がしたいと金沢大学工学部物質化学工学科に入学。卒業後、同大学院自然科学研究科へ進学、博士後期過程終了。その後、京都大学生存圏研究所へ就職、学生時代に行っていた研究(生分解性ポリマーの分子構造解析)の一部を発展させてみてはと現研究室の中村嘉利教授にアドバイスをもらったことをきっかけに2007年より現職。

自分を表現する場がここにはある

講義、実験、実習...
こなすことに精一杯の学生時代
学部生時代は目の前のことに必死で科学のおもしろさには気づけませんでした。4年で研究室に配属されてから、実験で予想した結果が出ることにワクワクしたりと、研究の楽しさを見出すことができるようになりました。楽しさの反面、思うようなデータがでなかったり、時間がなくプレッシャーを感じ辛くなることもありました。が、「投げ出さなければ必ず進歩はある」と信念を強くもってやってきました。その中で得られた達成感はずらなる科学の魅力へ繋がります。現在の研究活動に反映されていると考えています。

感謝の気持ちを忘れずに、
将来へ還元できる研究を
私は現在、間伐材、わら、竹、果樹剪定枝などの農林廃棄物や果皮、茶殻などの食品残渣等の未使用の植物資源から、微生物を用いてバイオ燃料や有用化学物質を生産するための研究を行っています。これは、これからの加速化していくであろう燃料問題に欠かせない研究です。すぐに役立つことも難しく、本格的に実用化されるまでには時間もかかりますが、私たちの子ども、孫もこの時代の時代に欠かせない大切なエネルギーを作るための重要なミッションを担っています。

研究者と母親の両立
私自身、第一子を半年前に出産したばかりで、周りの先生方、学生さん、家族など本当にたくさんの方に助けていただいています。大学からは、女性研究者のための支援として研究支援員の学生さんを1名、産前から就けていただき、育児との両立で限られた時間を集中して仕事できています。「周りのサポートがあつてこそ仕事が続けられる」という感謝の気持ちを忘れずに、今後も研究に取り組んでいきたいです。



My Favorite

4年次で研究室に配属されてからずっとデスクにあるペン立て

Kanako Yoshida

女性が働く環境を整えてくださっている、周りの先生に感謝

実習での出産シーンに感動
 大学時代、実習で出産に立ち会った時、神秘的で本当に感動しました。勉強以外では弓道部に所属し、充実した日々を過ごしていました。卒業後は、研修を経て関連病院で診療を行い、再び大学に勤務することになった際に教授と相談し、現在の婦人科腫瘍の研究班で研究しています。専門分野は婦人科腫瘍で、外来では腫瘍外来を担当。婦人科悪性腫瘍の患者さんの化学療法や婦人科疾患の術前・術後の患者さんの診療を行っています。

**働きやすい環境づくり
 周りの先生方に感謝**
 女性が働きやすい環境を整えてくださる周りの先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。今の私の置かれている環境はとても働きやすい環境だと思います。「我が子を保育施設に預けても働きたい！」と思えるのは、魅力ある仕事を与えてくれているからです。結婚しても出産しても働いている女性医師は多く、精神的なサポートがあるのも嬉しいですね。

仲間と家族に感謝。充実した毎日
 臨床や研究に忙しく、勤務時間も不規則なので、子育てとの両立が大きな課題だと思っています。医局の先生方の理解や家族の協力のおかげで、現在は仕事と子育てをしながら充実した毎日を送っています。保育園の送り迎えや食

My Favorite

業務の情報共有に産婦人科医局員に配布されているiPhone。



事の用意など、子育ては本当に大変。子どもは突然体調が悪くなったりするので、仕事を抜けられないときは本当に困りました。また、自身が出産を経験することで、患者さんに共感でき、仕事への見方・取り組み方も変わりました。ゆとりを持ってアドバイスできているような気がします。

そうすれば道は拓ける
 人生の分岐点に立った時、何かしらのアプローチに素直に反応してきた結果、今がある、という感じ。臨床も研究も終わりはなく常に目標を設定し自分を磨いていかなければならないと感じています。やりがいがあり、発見があると嬉しいですね。常に目標を立てて、それに向かってまい進する！そんな充実感が自分を支えてくれているようにも感じています。これまで研究面では上司の指導のもと行うことが多かったですが、自立した研究ができるように努力したいです。自分が今できることを少しずつ続けていけば、おのずと道は拓けてくるのではないかと思いますね。



吉田 加奈子

よしだ かなこ

徳島大学病院 地域産婦人科学講座 特任助教 博士(医学)

略歴
 島根医科大学医学部を卒業後、徳島大学大学院修了。同大付属病院、鳴門病院、三宅医院(岡山)、県立中央病院、徳島市民病院勤務を経て徳島大学病院周産母子センター助教、地域産婦人科学講座特任教授。現在に至る。

Nori Sato

まずは、やりたいことをやってみる!

黄色靭帯の肥厚に関する疑問から始まった研究
 腰部脊柱管狭窄症の患者さんを多く診ていて、その主な原因である黄色靭帯(脊椎にある靭帯)の肥厚がなぜ生じるのだろうと思ったことがきっかけで研究を始めました。まず研究を行うためにこの靭帯の組織を完全に溶かさなければならなかったのですが、思うようにできませんでした。今まで誰かができなかったことを成功させるために、失敗を繰り返して、多くの時間を費やしましたが、幸運にも成し遂げることができました。できないと思っていたことができた時の喜びは何物にも代えがたいです。研究はある意味ギャンブルのようですが、諦めずに続けることも時として大切であると改めて感じました。

リハビリテーションに秘められた患者の自立と未来の医療
 現在は入院患者へのリハビリテーションを処方する仕事を主にしています。社会復帰など自立の目的はもちろん、時には心のケア的な部分も担う場合もあります。また、すべての科と関わっている中で、それぞれの最新治療を常に知ることができ、とても勉強になります。昔とは違い、脳卒中ではできるだけ早くリハビリテーションを始める重要性が示されていて、最近では様々な内科疾患でも必要性がとわられています。整形外科と

My Favorite

子どもが「ママ」と書いてくれた絵



リハビリテーション、両方の観点から診療できる医師として、今後はリハビリテーションの普及にも力を注いでいきたいです。

女性に求められるのは 変化に対応できる柔軟性
 「まずはやりたいことをやってみる」これが私の持論です。私自身、現在2人の子どもの母として育児に奮闘しており、特に2人目を出産してからは夫婦ともに県外出身ということもあり、研究会、勤務にも制限があります。職場・家族等の周りの協力・理解のもと、何とか仕事を続けていく状況です。このように女性はライフステージにおいて状況が刻々と変化していきますが、まずはやりたいことをやってみて、壁にぶち当たったらその時々で悩みを解決していくという姿勢でよいのではないのでしょうか。方向転換することにより、新しく見えてくるものもあります。環境の変化に対応できる柔軟性があれば、何らかの形で好きなことは続けていけると思っています。

佐藤 紀

さとう のり

徳島大学病院リハビリテーション部 医員

略歴
 部活動中心に過ごしていた中、高校生時代、陸上競技で怪我を繰り返したことをきっかけにスポーツ医学に興味を持ち、徳島大学医学部へ入学。卒業後は同大学整形外科に入局。その後、関連病院勤務を経て、同大学大学院に進学および同大学病院リハビリテーション部で勤務。大学院は現在、出産・育児のため休学中。



貴女の研究！ 煌く未来のために



香川 征 / Susumu Kagawa

* 徳島大学長

多様な発展性を持つ徳島大学

女性の高等教育人口に占める比率の増加とともに本来少なかった理系への進学者（いわゆるリケジョ）の増加は、少子超高齢社会および持続可能な社会の形成に重要な一つの現象であるといえます。

一方で性差、ジェンダー概念の高まりとともに2005年12月に第二次男女共同参画基本計画、2010年12月第三次男女共同参画基本計画が発表されて以来、大学でも色々

な取り組みが行われるようになってきました。徳島大学では平成22年度文部科学省科学技術振興調整費にて「女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）徳島大学AWA（OUR）サポートシステム」が採択され、様々な活動および環境整備を行ってきまし

た。また平成21年12月に男女共同参画を宣言し、平成22年7月には男女共同参画推進本部を置き男女共同参画の推進のため積極的に取り組んできました。

徳島大学の男女共同参画宣言の内容は次のとおりです。「徳島大学は持続的発展を目指し、学術文化に先導的役割を果たすために多様性と発展性をもった教育・研究・就業環境の醸成に努めます。今後、継続して努力を重ね、すべての構成員一人ひとりが高い

女性研究者の在職率目標達成を目指して



岩川 雅士 / Masashi Iwakawa

* 徳島大学理事（総務・財務担当）
徳島大学副学長
徳島大学事務局長
男女共同参画推進室長

第4期科学技術基本計画（平成23年8月19日閣議決定）では、「女性研究者の登用は、男女共同参画の観点はもとより、多様な視点や発想を取り

入れ、研究活動を活性化し、組織としての創造力を発揮する上でも極めて重要である。このため、女性研究者の一層の登用及び活躍促進に向けた環境整備を行う」として、「自然科学系全体で25%という第三期基本計画における女性研究者の採用割合に関する数値目標を早期に達成するとともに、さらに30%まで高める」とされています。

本学では、平成22年度に科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル」が採択されたことを契機として、AWAサポートセンターが設置され、研究支援制度や女性研究者交流会の実施、また、蔵本地区に女性教職員休憩室が整備されるなどの活動により、女性研究者の在職率は19.2%（平成24年5月現在）まで増加しました。目標とする20%まであと少しのところまできています。

国立大学法人評価委員会による平成23年度業務実績評価においても、本学のこれらの取り組みについて、注目されるとの評価をいただいています。話は少し変わりますが、11月2日に本学で開催された第3回四国女性研究者フォーラムの講演者が、「男性研究者の多くが『理系研究に男女の向き不向きはない』と言い切る一方で、『家事、育児は主に女性の仕事』との潜在意識をもっていることも少なくないように思われる」との感想を述べておられました。

10年ほど前、小泉内閣が待機児童ゼロ作戦の推進を高らかに打ち上げて以来、我が国の男女共同参画への意識と取り組みは格段に進化したように思えます。しかしながら、こ

未来につなげる女性研究者を!!



本仲 純子 / Junko Motonaka

* 徳島大学AWAサポートセンター長
特任教授
元徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部教授
物質機能化学
徳島大学男女共同参画推進室員

東日本大震災に大津波、またそれに次ぐ原発事故（三重大）に襲われた日本は、大きな価値観の転換の岐路に立た

れていると思われま。資源の乏しい日本では、科学技術創造立国を維持し、更に強化しなければ国際競争の中で一層厳しくなる事が予想されます。また、少子高齢化が急速に進む日本の現状では、女性の能力を十分に活用するための活躍の場を作る事が急務だとも考えています。

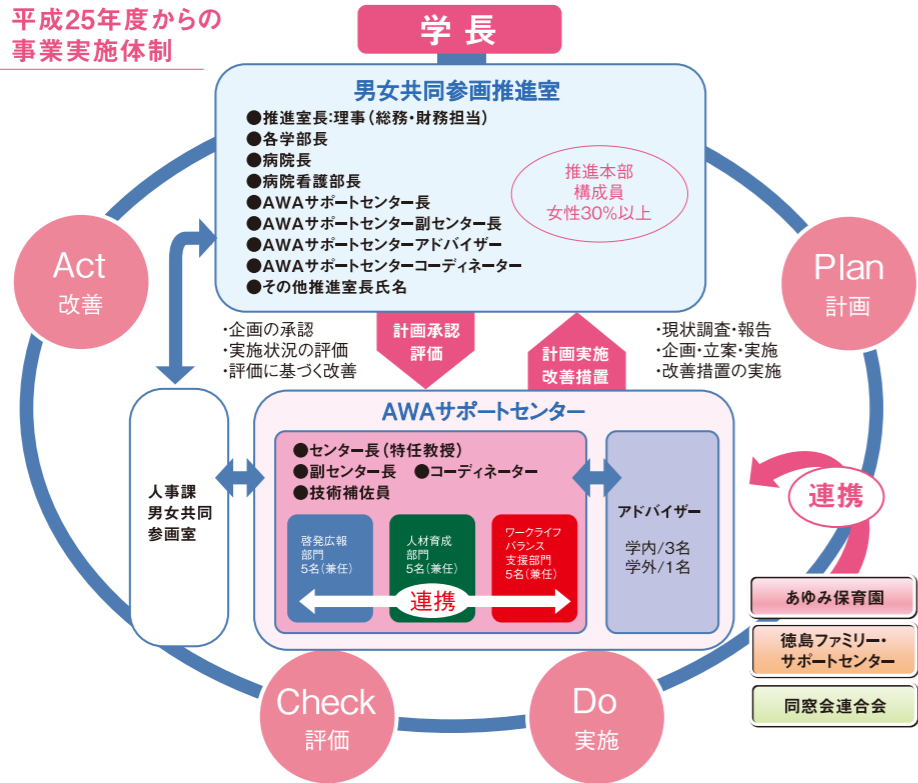
女性研究者の日本における現状について、国立大学・国立研究所で働く男女研究者3800名および理工系大学の学部長や研究所長などの組織長433名を対象に調査がされました。（参照：文部科学

省2001年～2002年度科学技術振興調整費調査研究報告書「科学技術政策提言」科学技術分野における女性研究者の能力発揮）その中で、「研究者の能力発揮」その魅力について質問したところ、男女ともに「研究が好きで、それを仕事とすることが出来る」「知的な刺激が得られる」「自分自身の能力を活かせるな」などを挙げています。回答に男女差がほとんど見られない中で、女性がより多く魅力を感じている項目に「男女平等だ」「生統けられる」「雇用身分が安定している」が挙げられています。これは、研究職

は男女平等であるはずという期待感の現れであると解析されています。また、「研究者としてのロールモデルがいたか」の設問に対しては、男性の7割がロールモデルがいたとしており、そのうちの多くは「大学院時代の指導者」を挙げています。一方、女性研究者の6割はロールモデルが「いない」としています。また、「ロールモデルがいる」と答えた人は、職場等の身近な女性研究者を挙げています。これは、身近にロールモデルがいることが職業選択や継続に大きく影響することを現

「女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)」実施終了後の体制 AWAサポートセンターの今後の取組みについて

平成25年度からの
事業実施体制



徳島大学では、平成22年～24年度にわたり「女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)」による「徳島大学AWA(OURサポートシステム)をAWAサポートセンターが中心となり、啓発・広報部門、人材育成部門、ワークライフバランス支援部門の3部門を設け、意識啓発、女性研究者の研究支援、ワークライフバランスの実現など

に取り組んでまいりました。事業実施期間終了後も、継続してAWAサポートセンターを男女共同参画推進の事業実施母体とし、啓発・広報部門、人材育成部門、ワークライフバランス支援部門の3部門に男性教員を迎え、更なる男女共同参画推進事業を行ってまいります。

輝く女性のロールモデルを



山内 あい子 / Aiko Yamauchi

徳島大学AWAサポートセンター副センター長
徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部教授
医薬品情報学分野
徳島大学男女共同参画推進室員

AWAサポートセンターが開設されて以来、特に子育て世代の女性研究者がワークライフバランスを保ちつつキャリアアップしていきけるようにと、学長のリーダーシップのもと様々な取組が実施されて参りました。学内保育園の拡張、女性職員休憩室や衛生環境の整備なども進められていま

す。子育て支援としては、多くのベビーシッター養成講座修了者が生まれ、男女職員が学内でベビーシッター制度を利用することができるようになりました。またメンター研修会には、女性だけでなく男性職員も参加しており、本学における男女共同参画意識の高まりが感じられます。研究面

でも、出産や育児で研究時間が確保の困難な女性研究者やそのような伴侶をもつ男性研究者にも研究支援員が活躍するようになりました。

最近では、わずかながら、すべての職種で女性研究者の割合が増えています。家庭を持ち、子育てを楽しみながら、充実した研究生活を送る輝く女性が増え、若い学生達のロールモデルとなつていただきたいと思います。AWAサポートセンターが本学の職員や学生に親しまれ、仕事と育児、介護の両立で困った時に頼りになる身近な支援センターとして今後も活動を広げていきます。皆様の一層のご協力をお願いいたします。

新しい日本社会の女性研究者



玉置 俊晃 / Toshiaki Tamaki

徳島大学AWAサポートセンターアドバイザー
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長
徳島大学医学部長
徳島大学大学院医学教育部長
徳島大学男女共同参画推進本部室員

日本人の人口が減り始め、少子高齢化が進んでいます。平成24年の年末に実施された衆議院議員選挙で自由民主党が圧勝して、新しい内閣が発足しました。自由民主党の党運営の中心を担う自由民主党・党3役、野田聖子総務会長と高市早苗政調会長が就任して世間を驚かせました。昨今の政治混乱や経済低迷などの問題解決に、女性の考え方や発想が国政に必要であるとの判断でしょう。既に多くの企業では管理職やチームリーダーに女性を抜擢し、大きな成果をあげている企業もあります。

一方、国立大学法人では男女共同参画の推進が求められているにもかかわらずその動きは極めて遅く、目に見えない成果も少ないのが現状です。徳島大学でも、理事や教授として働く女性数は増加していません。しかし、志高く世界を目指す女子学生は増加していると思います。医学部で実施している学部学生の海外短期留学の希望者は女子学生の方が多いし、博士課程に進学する女子学生も増えていきます。将来に向けて日本社会が安全で安心な社会を形成していく上で、女性の視点での改革や改善が不可欠でしょう。ヘルスバイオサイエンス分野における新規研究領域や新規融合研究領域の開発においても、世界を目指す女性研究者の活躍を大いに期待しています。

AWAサポートシステム 支援制度の3つの柱



1 研究支援制度

出産、育児等により研究時間確保が困難な教員を対象にして、当該教員の指示の下で研究補助業務に従事する研究支援員を配置する制度です。内容は、研究支援員に必要な研究補助業務。《対象》徳島大学の教員(特任教員を含む)。妊娠中・出産・子育て中の研究者および同大学研究者である配偶者。

《期間》年度内で、男女共同参画推進室会議で認められた期間。

《支援対象者等の選考》各部長からの推薦及び研究支援制度利用計画書に基づき、AWAサポートセンターで選考の上、男女共同参画推進室会議にて支援対象者、支援期間、時間等の支援内容について決定する。

2 AWAベビーシッター制度

育児と仕事・研究の両立のための育児支援制度です。本センターでは、養成講座を実施しベビーシッターを養成、利用希望者及びAWAベビーシッターへの必要な情報の提供、両者間の調整、幅広い広報に加え、徳島ファミリーサポートセンターなどと連携した育児支援を行っています。

《対象》徳島大学教職員。本学大学院生検討中。

《保育対象》0歳～小学校6年生(但し学内保育場所においては2歳から)学内保育場所は、定める学内各学部・施設保育スペース(施設の都合により変更あり)。

3 メンター制度

女性研究者の就業継続やキャリア形成の支援として、女性研究者(メンター)が抱える諸問題について経験豊かな先輩研究者(メンター)から指導・助言を受けることができる制度です。

《対象》「メンター」徳島大学の女性研究者(学術研究員含む)および女性大学院生、その他AWAサポートセンター長が必要と認める者。メンターは書面により利用を申し込む。

「メンター」メンターを支援したいとする経験豊かな本学教職員。

《支援内容例》

- ・研究と家庭との両立・継続に関すること。
- ・進路や分野選択、将来展望、研究職としての仕事内容に関すること。
- ・その他、メンターの研究活動の支援に関すること等。

また本センターはメンターとメンティーのコーディネートを行い、制度の円滑な運用を図り、個人情報・プライバシーポリシーについても適切に取り扱っています。

役割分業で気持ちも負担も軽減



葉久 真理 / Mari Haku

徳島大学AWAサポートセンターアドバイザー
徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部 教授
助産学分野
徳島大学男女共同参画推進室員

「徳島大学AWA(OUR)サポートシステム」が採択されてから、早3年が過ぎようとしています。1日24時間が、年々短くなっているように感じる今日この頃です。

子どもがいる生活が始まったからは、保育所通いの時期、小中高生生の時期と、その時その時を夢中で駆け抜けてきたように思います。私は、助産学という「女性しかできない職業」領域で生きてきましたので、職場において女性としての生きにくさをあまり感じることなく働いておりました。多くの女性が、まだまだ男女共同参画とはいえない状況の中、ストレスを感じている実態を知りました。

一方、家庭においては、「女性は損だ」と騒いでいますが、

自分自身が、家事育児は自分がしなくてはと、役割を取り込んでいたことにも気がつきました。子育て世代の女性が、仕事を辞めて子育てに向かう気持ちはとてもよくわかります。子を慈しむ母性・女性性なるものがそのような行動に向かわせるのでしょうか。女性の役割だと思いつまなないで、他者に任せる努力が必要で、自分がなくてはならない職業に就くこと、自分がすべてをこなさなくても、それができるようになると思える事なく働いておりました。家庭内システムがうまく回転していくためには、夫をはじめとして「教育」なるものが必要となります。さあ、女性の皆さん、役割分業をはじめましょう。